

老健(在宅復帰)

自宅に閉じこもり妻の介護負担が増大したケースに対し、主体性を引き出し在宅復帰ができた事例

年齢:64歳 性別:男 疾患:脊髄小脳変性症(発症から7年)

要介護5 ⇒ 区変申請中

老健入所事例

【介入までの経緯】30代で土建業起業。蟻のように働き王様のように遊ぶ生活が特徴。50代で発症し緩徐性の進行に伴い介助量増加。妻が重介護の蓄積で持病悪化し一時入院が必要に。居宅CM提案により、在宅強化型である当老健入所。
【本人・家族の生活の目標】妻と二人暮らしの本人・妻の共通点としては、「可能な限り自宅生活を送りたい」「移乗をもっと楽に行きたい」。本人は「外出機会が欲しい」。妻は「持病悪化しないように介護量をコントロールしていきたい」

開始時(入所前・入所時)

中間(1ヶ月後)

在宅復帰(2ヶ月)

ADL・IADLの状態

○ADL全般に7~10割介助(日内変動あり:夜間は低下)。
 ○環境調整が不十分で、本人の活動を阻害し、介護負担も大きくなっていった。
 ○上記による低活動状態。

○ADL全般に3~7割介助。
 ○日中における移乗の自立。
 ○フロア内動線(短距離)の車椅子自走。

○ADLレベル維持。
 ○退所前買物外出では概ね車椅子自走ができた。
 ○自主的な離床拡大・活動意欲の向上。
 ※退所後は定期ショートステイでフォロー。

生活行為の目標

○(上位目標である買物外出に向けた)自力で車いす移乗ができるようになる。

○(上位目標である買物外出に向けた)長距離の車椅子自走。

【考察】インテークからICF視点で課題・目標構造を整理・共有し、本人の能力活用・環境適合を図った結果、できるADLが拡大・習慣化した。在宅移行に際しては、居宅CMと協働でマネジメントを行い、定期ショートステイを軸にした生活のモニタリングより継続した主体的活動には必須であると判断した。

介入内容

○本人の能力が発揮しやすい環境設定。
 ○本人・他職種へ移乗目的と方法の指導
 ○移乗動作練習。
 ○能力を引き出す介護方法の指導。

○本人・他職種への自走目的の共有。
 ○日常的な車椅子自走機会を増やす。
 ○本人の能力・環境・妻の介護力とすり合わせた動作・介護方法の指導。

〈入所前訪問〉
ICFの観点でのアセスメント



〈退所前・後訪問〉
能力・環境・介護力の適合化



主体的な離床・活動
定期ショートステイでの外出創出



結果 : 本人の能力・環境・妻の介護力との適合化が図られ、自力で移乗・車椅子の自走・主体的活動の向上に繋がった。

課題 : 進行性疾患ゆえ、適宜本人の能力評価・環境適合・介護力とのすり合わせと、支援者間で速やかに共有できるマネジメントが必要。